ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.1 January 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

1

CONTENTS

- 巻頭言
  祭儀の持ち方
  ／永尾教昭 …… 1
- 「おさしづ」語句の探求（44）
  「おさしづ」第６巻における本部事情と「道」
  ／澤井治郎 …… 2
- 日本語教育と海外伝道（30）
  国際化の中での日本語教育①
  ／大内泰夫 …… 3
- ライシテと天理教のフランス布教（23）
  2020年10月16日の歴史地理教師斬首事件を受けて
  ／藤原理人 …… 4
- キルケゴールで読み解く21世紀（28）
  可能性と現実性―コロナ禍の中でキルケゴールを読む
  ／金子　昭 …… 5
- イスラームから見た世界（９）
  神（アッラー）の名を唱えて生きるムスリムたち
  ／澤井　真 …… 6
- 宗教伝統における聖典の意味構造（４）
  イスラーム聖典のパロール性と井筒俊彦
  ／澤井義次 …… 7
- 遺跡からのメッセージ（65）
  大和の文化遺産を学ぶ③ ―飛鳥の古墳と聖なるライン
  ／桑原久男 …… 8
- 2020年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（６）
  第２講：77「栗の節句」
  ／佐藤孝則 …… 9
- 図書紹介（121）
  中純子著『唐宋音楽文化論－詩文が織り成す音の世界－』
  ／堀内　みどり …… 10
- おやさと研究所ニュース …… 11
  第334回研究報告会（尾上貴行）／第335回研究報告会（清水直太郎）／『グローカル天理』合本、バックナンバーについて／2020年度公開教学講座の案内

巻頭言

祭儀の持ち方

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

前号巻頭言で、天理教の海外布教を考える上で、原典の一つである「みかぐらうた」の外国語への翻訳について言及した。これの文言に合わせて踊る「ておどり」があり、外国語にすると語順が変わってしまうことが、今なお歌唱し踊れるようには翻訳されていない一つの原因と思われると述べた。

世界宗教と言われるような宗教でも、例えばコーランはアラビア語で理解するべきと言われ、世界には当然意味のわからない信者もいるだろうが、それでも世界で伸びつつある。また仏教の経典は、一般の人には理解不能だが日本国内でも大きく広がっていった。

これらを斟酌すると、「みかぐらうた」もたとえ外国人には意味がわからなくても日本語で唱えれば良いのではないかとも思える。しかし、その点に関しては天理教の祭儀の持ち方が特殊なので、同じように考えることはできないだろう。

通常、宗教は、専業か否かはさておき信仰の道を生業にする人（聖職者、出家）と一般信者（在家）で構成される。祭典で祭儀を司るのは聖職者などと呼ばれる人たちで、信者は後方で参列するだけである。聖職者は特殊な服装をして特殊な儀式を執り行う。神道もキリスト教も仏教も、皆そういう形である。

これをスポーツの試合に例えると、聖職者はいわば「選手」であり、信者は「観客」だろう。選手たちは特殊な服装（ユニフォーム）を着用して、特殊なこと（競技）をする。観客はそれを見るだけだ。公的な試合で、観客も競技場へ降りてきて競技をするなどということはない。つまり一般信者が祭儀を執行することはない。

例外は、イスラム教だろう。この場合、いわば全員が観客席にいるようなものである。全員で共に礼拝を行う。特に特殊な服装や特殊なことをするわけではない。非ムスリムから見れば、メッカへの礼拝や女性の格好は特殊なことに見えるが、イスラム社会では普通のことである。

天理教の場合、祭典における聖職者と信者の境界がない。つまり、ある人が入信し教会などに通うようになると、多くは会長などから「おつとめの鳴物の一つでも覚えないか」と促される。そして皆で祭儀を勤める。スポーツに例えるならば、スタンドにいた熱心な観客が、競技場に降りてユニフォームを着て競技をするように誘われ、そして全員で競技するようなものである。通常の宗教の祭儀形式しか知らない人は、ここで戸惑う。実際、筆者が天理教ヨーロッパ出張所長を務めていた頃、あるフランス人が毎日のように参拝に来だした。筆者がある日、彼に「そろそろハッピでいいから着用して、鳴物の練習をしないか」と促した際、彼は驚いて「私は生涯この信仰を続けるつもりだが、聖職者になるつもりはない」と答えた。またコンゴでは、ある信者が「天理教は複雑だ」と述べた。

仏教、あるいはラテン語でミサを執り行っていたカトリックの場合など、たとえ言葉がわからなくても聖職者（出家者）だけがそれを唱え、信者はそこに列席するだけだ。仮に一緒に唱えるとしても、文句に合った動作をするわけではないから、言葉の意味がわからなくてもさして問題はないかもしれない。しかし、天理教の場合、聖職者と信者が区別なく祭儀を司る、つまり楽器を奏でたり踊りを踊るので、その言葉がまったく理解できなければ、楽器演奏はともかく踊りを踊るのは多くの一般信者にとっては非常な困難を伴うことになる。いわば、意味のまったくわからない経を唱えながら、その意味に添った踊りを踊るようなものである。この点は海外布教の全体を俯瞰しながら、慎重に考慮していく必要はあるだろう。